

〔資料〕

## 清言小品『小窓幽記』解説

—「靈」の部から—

郭 莉 莉

中国古典文学といえば、唐代の「詩」、宋代の「詞」、元代の「曲」などを連想することが多いが、より新しい時代である明代と清代にもその時代を代表する古典文学である、「小品」と呼ばれるジャンルの文学がある。「小品」または「小品文」と呼ばれ、いわゆる「韻文」—「賦」や「詩」、「詞」、「曲」などの韻を踏む文体—と相対して韻を踏まない「散文」である。「小品」という名称は仏教用語に端を発する。仏教では仏經の完全訳本を「大品」と呼び、それと区別された簡略化された抄本のことを「小品」と呼んだ。明代の晩期において、多くの文人は自らが創作した独特の主題・風格を持つ文章をこの仏教用語にならって「小品」と呼び、文集名にもした<sup>(1)</sup>。特に明代晩期の文人がこの「小品」という文学を非常に熱心に創作し、大量の作品が世に出回り、結果「散文」の中の一つの文類として、広く当時そして後の世に知られるようになった。

このような明代・清代の「小品」という文学の中に、さらに「清言」という独特の文学形式が存在する。「清言」の厳密な定義は存在せず、当時自らの「小品」の作品を特に「清言」（もしくはそれに類似する呼び方）と呼んだ作家にも厳密な基準はなかったものと思われるが、一般的には短くそして内容的にいて警句のようなものを「清言」としていた。「清言」の「清」は清高、清雅、清奇など、清いという意味であり、「清言」は清い言論、議論を指す。内容は清雅と思われる文人の

(1) 例えば朱国幀は『湧幢小品』、陳繼儒は『晚香堂小品』、王思任は『文飯小品』、華淑は『閒情小品』、陳天定は『古文小品』など、「小品」と名付けた明人文集が数多く存在する。

趣味、書、画などを含む芸術品の鑑賞や、無欲であり、清高と思われる老荘思想、仏教思想に基づいた人生に関する格言などがある。当時はこの「清言」を「清言小品」、「清話」、「清語」、「言語小品」、「雑著」などとも呼んだ。「清言」の形式をとった作品の作品集の名前にも様々なものがあり、その当時は「清言」という名称には統一されていなかった。例えば屠隆には『娑羅館清言』、『続娑羅館清言』があり、呉從先には『小窓自紀』があり、陳繼儒には『太平清話』があった。その中でも成書が早かった屠隆の『娑羅館清言』に使われたことも一因となって、現代の学术界においては明清代の「清言」もしくは「清言小品」という名称で、この形式の文学作品を指すのが一般的となっている。

このような「清言小品」の一作品である『小窓幽記』<sup>(2)</sup>は、明代晩期の文人である陳繼儒（1558～1639）によって編纂され、出版当時、文人ならびに一般の人々に歓迎され好評を博した。『小窓幽記』の他に、陳繼儒の「清言」作品には『岩棲幽事』『安得長者言』『太平清話』『狂夫之言』などがあり、他の「清言」の作者に多大な影響を与えた<sup>(3)</sup>。明代や清代の「清言」作品の中で最も広く知られているものは『菜根譚』であり、版本の違う日本語注釈を入手することは容易である<sup>(4)</sup>。それに比べ、思想内容や文学形式の面から見てもそれに価値相当する『小窓幽記』の解釈は内外において少ない。本稿は、その『小窓幽記』の第四章・「靈」の部から三十条を選び、注釈を付ける<sup>(5)</sup>。

(2) 書名は『小窓幽記』とする版本と『小窓幽紀』とする版本がある。羅立剛校注、明清小品叢刊『小窓幽記』（上海古籍出版社、2000年）、盧豊編注、『小窓幽記解説』（黄山書社、2002年）などは「記」としている。呉言生編注、『小窓幽紀』（陝西旅游出版社、1999年）は「紀」としている。

(3) 同じく明代晩期の清言作品、『小窓自紀』（作者は呉從先）の書名は『小窓幽記』から名付けられたものである。また、陳繼儒は『小窓幽記』より広く知られた清言作品『幽夢影』の作者である張潮の憧れでもあった。

(4) 原書の著者は洪自成である。日本語の注釈は今井宇三郎の『菜根譚』（岩波書店、1977年）、中村璋八、石川力山訳注『菜根譚』（講談社、1986年）、吉田公平訳注『菜根譚』（たちばな出版、1996年）など多数ある。

(5) テーマ別で「醒」・「情」・「峭」・「靈」・「素」・「景」・「韻」・「奇」・「綺」・「豪」・「法」・「倩」の部と分れ、全書で千数百条がある。

[一]

事遇快意処当転，言遇快意処当住。

- ◆遇 遭遇する。ぶつかる。
- ◆快意処 気持ちの良いところ。
- ◆当 ～すべきである。
- ◆転 転換する。移転する。方向，位置または形式が変わる。
- ◆住 とめる。停止させる。

物事が気持ち良く進んだところで，調子に乗り過ぎず少し方向を変えた方が望ましい。言葉を気持ち良く発したところで，調子に乗り過ぎずそこでやめた方が望ましい。

[二]

儉為賢徳，不可着意求賢；貧是美称，只在難居其美。

- ◆不可 ～することができない。～してはならない。
- ◆着意 細心の注意を払って。念を入れて。ここでは自然の成り行きに任せず意識的に心がける，という意味合いを持つ。
- ◆難居其美 「難～」は「～するのは難しい」という意味である。「難居」はある状況や立場に居続けるのは難しいという意味。「難居其美」はその美徳を保ち続ける事は難しいという意味。

儉約することは賢明な徳行ではあるが，意識的に心がけてそれを求めることができない。貧困は美名ではあるが，その美徳を長く保ち続けることは特に難しい。

[三]

志要高華，趣要淡泊。

- ◆要 ～しなければならない。～すべきである。～する必要がある。
- ◆高華 (理想や目標が) 崇高であり，華やかである。
- ◆趣 趣味。趣興。面白み。
- ◆淡泊 無欲である。あっさりしている。

志向は理想高く，華やかでなければならない。しかし，趣味は欲張りの少ない，あっさりしているものでなければならない。

[四]

眼里無点灰塵，方可読書千卷；胸中没些渣滓，才能処世一番。

- ◆無点 「点」は「一点」の略語，少しという意味である。「無点」は少しもないという意。
- ◆灰塵 埃。ここでは，純粹ではない，埃のような汚れた考えの比喩である。
- ◆方 やっと。ようやく。「才」，「方才」とも言う。
- ◆可 ～しても良い。～することができる。
- ◆千卷 本千卷。数多くの本という意味の比喩。
- ◆胸中没些渣滓 「没些」の「些」は「一些」の略語。いくつか，少しという意味である。「没」は「無」と同義，ないという意味である。「没些」は「無点」と同様，少しもないという意味。
- ◆渣滓 滓。ここでは純粹ではない，無用な考えの比喩である。
- ◆能 ～することができる。
- ◆処世 世間渡り。処世。世間の事に対処する。
- ◆一番 一回。一度。一通り。

心の中に、目を曇らせる埃のような不純な考えが少しもなくなったら、やっと数多くの本を読むことができる。胸の中に少しも滓のような無用な考えがなくなったら、ようやく満遍なくこの世の事に対処することができる。

[五]

山澤未必有異士，異士未必在山澤。

- ◆山澤 山と沢。「山林」と同じ意味で使用され、騒がしい都市から離れた田舎や田舎での暮らしという意味である。世俗から逃れた昔の隠者たちの居場所とされるが、参政者の注意を引き、官位や隠者の美名を得るために田舎の暮らしをする偽りの隠者もいた。
- ◆未必 必ず～とは限らない。
- ◆異士 非凡な人。

田舎には必ず非凡な人がいるとは限らない。非凡な人は必ず田舎に暮らすとは限らない。

[六]

無事而憂，对景不樂，即自家亦不知是何緣故，這便是一座活地獄，更說甚麼銅床鐵柱，劍樹刀山也。

- ◆即 よしんば。かりに。例えば。
- ◆緣故 原因。わけ。
- ◆便 すぐに。じきに。
- ◆一座 大きな造物や場所を数える量詞である。ここでは地獄を数え、「一座活地獄」は「一つの生き地獄」という意味。
- ◆更說甚麼～ ～などと言うには及ばない。「甚麼」は名詞の前に置き、否定文に

使い、～など、という意味。

◆銅床鉄柱 仏教の教えに記述された地獄の刑罰。

◆劍樹刀山 「銅床鉄柱」と同様に、仏教の教えに記述された地獄の刑罰。

直面する問題が存在しないにも関わらず悩む。目の前に美しい景色があっても楽しく感じない。その上、悩んだり楽しく感じない理由が自分でさえ分からないというのは、まさに生き地獄である。この世を去った後の地獄にある銅床鉄柱や劍樹刀山などの刑罰の怖さなどを語る必要もないだろう。

### [七]

不作風波於世上，自無氷炭到胸中。

◆作風波 「作」は起こす。「風波」はもめごと、騒ぎという意。「作風波」は騒ぎを起こす。もめごとを起こすという意味。

◆自 自然に。

◆氷炭 氷と炭。極端な寒さを持つ「氷」と、極端な熱さを持つ、火の中の「炭」。相容れないものの比喩である。ここでは氷と炭が共存するような矛盾や衝突で生じた心の葛藤を表す。

無闇に名利などを求め、世間を混乱させるような行動をしなければ、自然に極端な苦しみ胸の中で生じるようなことにはならない。

### [八]

遺子黄金満屋，不如教子一經。

◆遺 残す。

◆満屋 「満」は満ちる、いっぱいになるという意。「屋」は家屋、家という意。

「満屋」は家中に充満すること。

◆不如 (程度や能力が) ～に及ばない。～に如かず。～の方がまだましである。

子女に家中に充満するほどの大量の黄金などの財産を残すより、経典の一つでもしっかりと教えてあげた方が良い。

[九]

事到全美処，怨我者不能開指摘之端；行到至汚処，愛我者不能施掩護之法。

◆全美 完璧である。非の打ち所がない。「全」は完全という意。

◆怨 憎しみを持つ。恨む。不平を言う。

◆端 (事の) きっかけ。糸口。

◆至汚 極めて汚れている。「至」は極めて、至ってという意味である。

◆掩護 庇う。

◆施 (手段を) 施す。実施する。施行する。

物事は非の打ち所がないところまで至ったら、例え自分に憎しみを持つ者でも、非難の種を撒くことができない。行動は極端に汚れるところまで至ったら、例え自分を愛護する者でも、庇う手段を取ることができない。

[十]

閉門即是深山，読書随处浄土。

◆即 「即」は、すぐ、他でもなくなど強調する際に使用される。「即是」は、他でもなくそうであるという意味で、「便是」と同義である。

◆随处 至る所。どこでも。

◆浄土 仏の住むという清らかな世界。極楽浄土。

門を閉じれば、まさに山の奥にいる。読書をすれば、どこにいてもまるで極楽浄土にいるようである。

[十一]

欲見聖人氣象，須於自己胸中潔淨時觀之。

- ◆欲 ～したい。「欲見」は見たいという意味。
- ◆氣象 様子。情況。「聖人氣象」は聖人の人格，気品。
- ◆須 ～しなければならない。～すべきである。
- ◆之 ここでは文の前半にある「聖人氣象」を指す。

聖人の気質や気品を見たいのであれば，自分の心が綺麗である時にしっかりと観なければならない。

[十二]

聞人善則疑之，聞人悪則信之，此满腔殺機也。

- ◆則 （二つの事柄の継起を表す）～すると。
- ◆殺機 殺意。殺気。

人の好評を聞いたらすぐ疑い，人の悪評を聞いたらすぐ信じる。これは胸の中に人を傷つける悪意が充満しているということである。

[十三]

士君子尽心利濟，使海内少他不得，則天亦自然少他不得，則此便是立命。



- ◆士君子 立派な人格を備えた教養のある人。
- ◆尽心 全力を尽くす。
- ◆利済 「利物済人」の略。世間の役に立ち、人々を救済すること。
- ◆使 ～させる。
- ◆少他不得 その人を欠くことができない。「少」欠く。不足する。「不得」は、できないという意味。
- ◆海内 国内。天下。
- ◆立命 命を成り立たせること。この世に生きる自分の命を正しく自覚し、意味あるものにすること。学問をよく修養し、自分の運命を切り拓いていくことが肝要であるという儒教の考えである。

立派な人格を備えた、教養ある読書人は一心に人々を助ける。そうすれば天下は彼を欠くことができない。すると、天もこの世にとって彼の重要性を認め、天も自然に彼を欠くことができない。これこそ自分の命を成り立たせる「立命」である。

#### [十四]

読書不独変氣質，且能養精神，蓋理義収攝故也。

- ◆不独 ～だけでなく。～のみならず。～ばかりでなく。
- ◆且 しかも。
- ◆蓋 ～だから。～であるから。「故」も理由を説明する際に使用する表現で、故に、だから、従ってという意味である。どちらも単独に、～だからという意味を表すことができるが、併用することも可能。
- ◆収攝 収めること。取り入れること。「収」は中に入れる、収めるという意。「攝」は収め取る、吸収するという意。

読書は、人の気質を変えるだけではなく、更に人の精神を養うことができる。なぜなら読書から得た道理と義理がその人に取り込まれるからである。

[十五]

君子雖不過信人，君子斷不過疑人。

◆雖 (逆接の) ～が。けれども。～と言えども。

◆斷 絶対に。断じて。

君子は人を信じ過ぎはしないが、人を疑い過ぎるということも断じてしない。

[十六]

人只把不如我者較量，則自知足。

◆較量 比較する。比べる。

◆自 自然に。

◆知足 満足する。満足に思う。現状に満足する。

自分より厳しい立場にいる人と己を比べてみさえすれば、人は自分の現状に満足することができる。

[十七]

看書只要理路通透，不可拘泥旧說，更不可附会新說。

◆理路通透 考えがしっかりとした道筋をたどること。「理路」は(思考や文章の)条理，道筋。

◆不可 ～してはならない。～することができない。

◆拘泥 固執する。融通ができない。

◆附会 付会する。こじつける。

本を読む際には、自分の考えの道筋をしっかりとたどることが特に重要である。定説に縛られてはいけない。また、新説に無理にこじつけてはもったいない。

[十八]

飢寒困苦，福将至已；飽飫宴遊，禍将生焉。

- ◆飢寒困苦 極端に金銭が欠乏し、飢えと寒さで困り苦しむこと。「飢寒」は飢えと寒さ。「困苦」は困り苦しむこと、あるいは貧乏で苦しむこと。
- ◆将 動作や情況が間もなくなされる、または発生しようとすることを表す。じきに～しようとする。間もなく～なろうとする。～であろう。
- ◆飽飫 満足する。満腹になる。「飽」は飽食する、満足するという意味。「飫」も同様に満腹になる、満足するという意味。

飢餓や寒冷がこもごも迫る貧苦の時の後にはまもなく幸福が訪れる。宴会などを飽きるほどして贅沢に行楽する日々を過ごすと、災難が間もなくふりかかる。

[十九]

打透生死関，生来也罷，死来也罷；参破名利場，得了也好，失了也好。

- ◆打透 物事の本質を見抜く、観破するという意。
- ◆生死関 乗り越え難い生と死への様々な思い。「関」は関所。重要な転換点、乗り越え難い時期や場面のこと。
- ◆罷 やめる。手を引く。「也罷」は、～でも良い、～でも宜しいという意味である。
- ◆参破 仏教の義理を悟り、物事の本質を見破ること。

生死への様々な思いを乗り越えることができれば、生きても良い、死んでも良い

と思えるようになる。名声と利益への様々な思いを乗り越えることができれば、得しても良い、損しても良いと思えるようになる。

[二十]

人勝我無害、彼無蓄怨之心；我勝人非福、恐有不測之禍。

◆勝 勝つ。勝れている。

◆不測之禍 予想できない災難。「不測」は案外、予想できないという意。

他人が自分より勝れているということは無害である。なぜならそうであれば他人には自分を恨む気持ちが蓄えないからである。自分が他人より勝れているということは幸運なこととは言えない。なぜなら思いもしない災難が発生する恐れがあるからである。

[二十一]

過分求福、適以速禍；安分遠禍、將自得福。

◆過分 分に過ぎる。あまり～し過ぎる。度を越す。

◆適 ちょうどいい。適度である。

◆速禍 禍いを招くことに繋がる。禍いが近づくのを早める。「速」は加速する、早めるという意。

◆安分 本分を守る。分に安じる。

◆遠禍 禍いから離れ、身を守る。「遠」は遠ざかる、遠ざけるという意。

幸福の追求において度を越えることは、まさに自分から災難に近づくのを早める行動である。本分を守り、立場に相応しい生活をしながら災難から遠ざかれば、自然と近いうちに幸福を得るはずである。

[二十二]

倚勢而凌人，勢敗而人凌；恃財而侮人，財散而人侮，循環の道。我争者，人必争，雖極力争之，未必得；我讓者，人必讓，雖力讓之，未必失。

- ◆倚勢 権勢を笠に着る。「倚」は頼る、力とするという意味である。
- ◆凌人 人を踏み付けにする。人を踏みにじる。
- ◆恃財 厩大な財力を持つことに頼って行動する。「恃」は頼む、力とするという意味である。
- ◆侮 侮る。馬鹿にする。苛める。
- ◆雖 (文頭に使われる) ～と言えども。～ではあるが。けれども。
- ◆極力 全力を尽くして。極力。
- ◆未必 必ずしも～とは限らない。

権勢を笠に着て人を踏み付けにすると、権勢に陰りが出た際に人に踏み付けにされる。厩大な財力を持つことに頼って人を侮ると、財力を失った際に人に侮られる。これは循環の道である。争う姿勢を持つ人に対しては、周りの人も必ず争う態度を持って接する。力の限り争っても、必ずしも得をするとは限らない。讓る姿勢を持つ人に対しては、周りの人も必ず讓る態度を持って接する。力の限り讓っても、必ずしも損をするとは限らない。

[二十三]

清閑無事，坐臥随心，雖粗衣淡飯，但覺一塵不染；憂患纏身，繁憂奔忙，雖錦衣厚味，只覺万状苦愁。

- ◆清閑 のんびりして静かである。暇で静かである。
- ◆随心 心のままになっている。意に適っている。
- ◆粗衣淡飯 目の粗い衣服と味の薄い食事。素朴な衣服と質素な食事。

- ◆但 ただ。だけ。ばかり。「覚」は感じる。「但覚」はただ～だけを感じる、という意味。
- ◆一塵不染 非常に清潔で塵一つないこと。
- ◆憂患 憂患。心配事と苦しみ。
- ◆纏身 身に付き纏う。纏わり付かれる。「纏」は付き纏う、纏わるという意。
- ◆奔忙 忙しく走り回ること。忙しく立ち働く。
- ◆锦衣厚味 華麗な服装と豪華な食事。生活の豪華を極める形容。

何事もなく、悠々自適な暮らしをし、自由に座ったり横になったりすることができれば、素朴な衣食であっても心の中にはただすっきりとした気持ちが満ちる。心配事と苦しみに纏わり付かれ、多くの悩み事を持ち忙しく走る日々であれば、豪華な衣食であっても様々な辛い憂愁しか感じることはできない。

#### [二十四]

我如為善，雖一介寒士，有人服其德；我如為惡，縱位極人臣，有人議其過。

- ◆如 もし。
- ◆為善 善行をする。この「為」は、～をするという意。
- ◆一介 一人。「一個」と同義。
- ◆寒士 貧しい読書人。「寒」は貧困という意。
- ◆服 感服する。信服する。服従する。
- ◆縦 例え。よしんば。

善行を行えば、ただ一人の貧しい読書人であっても、我々の徳に感服する人がいるはずである。もし悪いことをすれば、例え朝廷の大臣という極めて高い官位にいる人でも、我々の過ちを批判する人がいるはずである。

[二十五]

成名每在窮苦日，敗事多因得志時。

- ◆成名 名を成す。有名になる。
- ◆每 ～する度ごとに。
- ◆敗事 失敗する。
- ◆得志 志を遂げる。願い通りになる。多くには名利上の欲望の満足を指す。

名声の獲得は貧苦の日々を過ごしている間に多くなされる。失敗は志を遂げ、成功したと思われる時に多くなされる。

[二十六]

讓利精於取利，逃名巧於邀名。

- ◆精於 ～より賢い。～より利口である。「精」は賢い，優れているという意。
- ◆逃名 自ら名声を逃れる。
- ◆巧 手や口が器用である，上手である。
- ◆邀名 名声を求める。「邀」は求める，得ようとするという意。

利益を讓ることは利益を取るより賢明である。また，名声を逃れることは名声を求めるより巧みなことである。

[二十七]

說得一句好言，此懷庶幾才好；攬了一分閑事，此身永不得閑。

- ◆一句 文一つ。一文。「句」は言葉を数える量詞。

◆庶幾 どうにか～できる。そうして初めて～できる。「庶幾乎」,「庶乎」とも言う。

◆才 やっと。

◆攬 一手に引き受ける。請け負う。

◆一分 一つ。「分」は物事を数える単位である。

◆閑事 自分に関係のない事。重要でない事。

一文の良い言葉が言えたら、ようやくこの胸に少し気持ちよく感じられる。自分と無関係な些細な事に一つ関わったら、この身は永遠にゆとりのある時間を得られない。

#### [二十八]

凡名易居，只有清名難居；凡福易享，只有清福難享。

◆凡 平凡。

◆易居 ある立場にいるのが容易であるということ。「易～」は～し易いという意。

◆清名 名声や物欲にとらわれない，無欲であるという名声・美名。

◆清福 心配もない苦勞もない幸せな暮らしの形容。無事息災。

◆難享 享受し難い。「享」は持つ，楽しむという意。「難～」は～し難いという意。

平凡な名声を持つのは容易である。無欲であり，清しいという美名のもとに長くいつづけるのは難しい。平凡な幸福を楽しむのは容易であるが，悠々有閑である幸福は享受し難い。

#### [二十九]

士君子貧不能濟物者，遇人痴迷處，出一言提醒之；遇急難處，出一言解救之，亦是無量功德。



- ◆濟物 世間を救済すること。
- ◆提醒 思いつかせる。注意を与える。気付かせる。
- ◆痴迷 無我夢中になる。迷い溺れる。
- ◆急難 急難。差し迫った難儀。
- ◆無量 非常に大きい。計り知れない。
- ◆功德 (仏教用語) 功德。功績と徳行。

徳のある読書人は、貧困のため他人に物質的な援助ができなくとも、迷う人があれば一言助言し、その人に気付かせる。また、急難に遭遇した人があれば、一言助言し、その人を救う。これも甚大な功德である。

### [三十]

自古及今、山之勝多妙於天成、每壞於人造。

- ◆勝 景色が勝れているところ。素晴らしさ。
- ◆妙 良い。素晴らしい。立派。「妙於～」素晴らしさは～にある。
- ◆天成 自然である。天然のまま。

昔から今まで、山の勝れているところの多くは、自然であることである。人工的に手を加えるたびに破壊されてしまう。

### 参考文献

- 呉言生編注、『小窓幽紀』(仏縁叢書)、陝西旅游出版社、1999年。  
 羅立剛校注、『小窓幽記』(明清小品叢刊)、上海古籍出版社、2000年。  
 盧豊編注、『小窓幽記解説』、黄山書社、2002年。  
 洪自誠、『菜根談』、岳麓書社、1991年。  
 今井宇三郎注訳、『菜根譚』、岩波書店、1977年。  
 中村璋八、石川力山訳注、『菜根譚』、講談社、1986年。

- 吉田公平, 『菜根譚』, たちばな出版, 1996年。
- 陳繼儒, 『眉公雜著』(1~4), 偉文圖書公司, 1977年。
- 胡紹棠編注, 『陳眉公小品』(明人小品十家), 偉文圖書公司, 1977年。
- 吳言生編注, 『小窓自紀』, 陝西旅游出版社, 1999年。
- 程不識編注, 『明清清言小品』, 湖北辭書出版社, 1993年。
- 台湾中央圖書館編, 『明人伝記資料索引』, 中華書局, 1987年。
- 陳万益, 『晚明小品与明季文人生活』, 大安出版社, 1988年。
- 曹淑娟, 『晚明性靈小品研究』, 文津出版社, 1988年。
- 吳承学, 『晚明小品研究』, 江蘇古籍出版社, 1998年。
- Kuo, Lili. *On Aesthetic Issues Surrounding the Late Ming Landscape Essay*, MI: UMI, 2001.
- 羅筠筠, 『靈与趣の意境—晚明小品文美学研究』, 社会科学文献出版社, 2001年。
- 郭莉莉, 「清言小品『小窓幽記』解説—「醒」の部から—」, 『千葉商大紀要』第40卷第3号, 千葉商科大学国府台学会, 2002年。
- 郭莉莉, 「清言小品『小窓幽記』解説—「醒」・「情」・「峭」の部から—」, 『外国語外国文化研究』第13号, 国士舘大学外国語外国文化研究会, 2003年。